九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

言語形式の自立性と音韻現象：現代朝鮮語の〈n挿入〉を対象として

辻野, 裕紀
九州大学大学院言語文化研究院

https://hdl.handle.net/2324/1687699

出版情報：朝鮮学報. 229, pp.1-32, 2013-10. 朝鮮学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

言語形式の自立性と音韻現象

——現代朝鮮語の〈n 挿入〉を対象として——

辻　野　裕　紀

【要旨】本稿は，現代朝鮮語における〈n 挿入〉の形態論的条件について論ずるものである。

多くの先行研究では，〈n 挿入〉が起きるための形態論的条件として「後行要素が自立形態素であること」を挙げている。しかし，一部の先行研究が指摘するように，これには次のような「反例」がある：

①後行要素が補助詞요 yo の場合

②後行要素が漢字語接尾辞の場合

これら①，②の場合には，後行要素が自立形態素ではないにもかかわらず，〈n 挿入〉が生じ得，どのように説明すべきかが問題となる。

そこで，本稿では，まず，言語形式を「自由形式」か「拘束形式」のいずれかに二者択一的にカテゴライズしてきた従前の研究の問題点を剔抉し，言語形式の自立度の階層性，連続性を指摘した。その上で，服部四郎(1950/1960)などを参看しつつ，形態論的条件の反例となる①と②を検討した結果，①補助詞요 yo，②漢字語接尾辞はともに，拘束形式の中では，相対的に自立性が高いことが明らかになった。このことは，とりもなおさず，〈n 挿入〉の形態論的条件として，後行要素の自立性に対する着目が正しいことを意味している。つまり，この形態論的条件に対して，一部の先行研究で出された反論は穏当ではなく，〈n 挿入〉が生じるためには，後行要素は，狭義の完き自立形態素ではなくとも，自立的な要素であることが必要だと結論づけうる。

目　次

1．前言

2．〈n 挿入〉とはいかなる現象か：〈終声の初声化〉と〈n 挿入〉

3．〈n 挿入〉が生じるための形態論

的条件
4．形態素の「自立性」とは何か：自立度の階層性
4.1. 自由形式と拘束形式
4.2. 附属語と附属形式
5．補助詞요 yo の自立性をめぐって
5.1. 結合要素の非選択性（原則Ⅰ）
5.2. 分離性（原則Ⅱ）
5.3. 交換可能性（原則Ⅲ）
5.4. まとめ：補助詞요 yo の自立性
5.5. 요 yo の異形態 /요 yo～이요 iyo/ について
6．漢字語接尾辞の自立性をめぐって
7．結語

1．前　言

本稿は，現代朝鮮語における所謂〈n 挿入〉について論ずるものである。なかんずく，〈n 挿入〉の形態論的条件を闡明するところに本稿の目的がある。〈n 挿入〉については，これまでも，菅野裕臣 (1965)，Chung, Kook [정국] (1980)，최정순 (1986, 1995)，성낙수 (1987)，기세관 (1990, 1991, 1999)，고광모 (1991, 1992)，Kim-Renaud, Young-Key [김영기] (1991)，김승호 (1992)，엄태수 (1995, 2010)，김정우 (1998)，김유범 외 (2002)，김선철 (2003, 2006)，국경아 외 (2005)，오미라 (2006)，辻野裕紀 (2012) など，多くの研究者が様々な視角から論じてきたが，その形態論的条件については十分に解明されているとは言いえない。

ところで，朝鮮語は，音素の交替が激しく，形態音韻論的に複雑な言語であるが，そうした形態音韻論的交替の実現様相に，形態素の自立性が関与することがある。例えば，옷 os/od/[oᵗ]《服》という語は，안 an/an/[an]《内側》という自立語と結びつき，옷안 osan《服の裏地》という複合語となると，[odan] と発音されるが，에 ey/e/[e]《…に》という助詞（付属語/의존어）と結びつき，옷에 osey《服に》となると，[ose] と発音される。すなわち，{옷}《服》という形態素には，/od～os/ という2種の異形態が存在し（[ᵗ] と [d] は同一音素 /d/），そこでは /d～s/ という音素交替が生じているわけだが，/d/ と /s/ のどちらの音素が実現するかは，結合する要素が自立的な要素か依存的な要素かによって決定される。結合する要素が自立的であれば，単独形と同じ異音が実現し，結合

する要素が依存的であれば，単独形とは異なる異音が実現する。

このように，朝鮮語の音韻現象には，形態素の自立性が関与することがあるが[2]，本稿で扱う〈n 挿入〉も，そうした事例のひとつに含めることができるものと考えられる（詳細は後述する）。しかし一方で，後に述べるように，中には，「反例」と思われる例も複数存在し，その形態論的条件については，衆目の一致を見ていない。そこで，本稿では，言語形式の「自立性」とは一体何かという根源的な問題について，一般言語学や日本語学の成果をも援用しつつ攷察し，その上で，〈n 挿入〉をめぐる言語事実を改めて眺めることで，〈n 挿入〉が生じるための形態論的条件に肉迫する。

2．〈n 挿入〉とはいかなる現象か：〈終声の初声化〉と〈n挿入[3]〉

現代朝鮮語において，終声（音節末子音 /coda; final）を持つ音節，すなわち閉音節（closed syllable）に，母音（半母音も含む）で始まる音節が続くとき，当該の終声は後続する音節の初声（音節頭子音 /onset; initial）として実現する。つまり，朝鮮語において，(C)VC ＋ V(C) という音節連続が生じると，休止（pause）を入れない限り，(C)VC$V(C) と発音されることはなく，必ず，(C)V$CV(C) と発音される（$ は音節境界[4]）。これを〈終声の初声化[5]〉（initialization of finals）と呼ぶ。

一方で，このような音韻論的環境のうち，後続音節が /i/ ないし半母音 /y/ で始まる場合（(C)VC ＋ i(C)，(C)VC ＋ yV(C)）には，後続音節の初声に /n/ が挿入され，終声の初声化が阻止されることがある。これを〈n 挿入[6]〉と呼ぶ[7]。

【終声の初声化】

일본 ilpon [ilbon]《日本》＋ -어-e[ɔ]《語》

→일본어 ilpone [ilbonɔ]《日本語》

못 mos [mot̚]《釘》＋이 i [i]《が》→못이 mosi [moʃi]《釘が》

못 mos [mo:t̚]《…できない》＋옵니다 opnita [omnida]《来ます》

→못 옵니다 mos opnita [mo:domnida]《来られません》

【n 挿入】

솜 som [so:m]《綿》＋이불 ipwul [ibul]《布団》
→솜이불 somipwul [so:mn̲ibul]《綿入りの布団》
국민 kwukmin [kuŋmin]《国民》＋윤리 yunli [julli]《倫理》
→국민윤리 kwukminyunli [kuŋminn̲julli]《国民倫理》
막− mak- [ma^{k}]《荒い》＋일 il [i:l]《仕事》
→막일 makil [maŋn̲il]《荒仕事》
맨− mayn- [mɛn]《何も混ざっていない》＋입 ip [i^{p}]《口》
→맨입 maynip [mɛnn̲i^{p}]《空腹》
한 han [han]《した》＋일 il [i:l]《こと》
→한 일 han il [hann̲il]《したこと》
옷 os [o^{t}]《服》＋입다 ipta [i^{p}t'a]《着る》
→옷 입다 os ipta [onn̲i^{p}t'a]《服着る》

このように，現代朝鮮語において，閉音節に /i, y/ で始まる音節が続くと，話者は〈n 挿入〉と〈終声の初声化〉のうち，必ず 1 つを義務的に選択しなければならない。(C)VC ＋ i(C)，(C)VC ＋ yV(C) という音節連続が生じると，単一の気息群（breath group）で発音する限り，派生語，複合語，句を問わず，〈n 挿入〉か〈終声の初声化〉のいずれか 1 つが必ず生じるのである。したがって，「〈n 挿入〉が起きるか起きないか」という問いは，「〈n 挿入〉と〈終声の初声化〉のどちらを選択するか」という問いとほぼ同義である。従前の研究では，〈n 挿入〉と〈終声の初声化〉とを対峙させて論ずることはあまり行われていないが，〈n 挿入〉をこのように位置づけることは，次章で触れる〈n 挿入〉の機能を考える上で，非常に重要である。

3．〈n 挿入〉が生じるための形態論的条件

終声の初声化は，音節構造論ないし音節接合論とでも呼ぶべき視座から見据えると，音節構造の変容を引き起こすデバイスである。すなわち，終声の初声化は，先行要素の (C)VC という音節構造を破壊して (C)V

に[8]し，音節境界と形態素境界の不一致を齎す現象である。一方で，〈n 挿入〉は，後行要素の頭音に /n/ を挿入することで，音節構造の変容を阻止し，音節境界と形態素境界を一致させる，ある種の緩衝装置（buffer）と言える。かかる説明だけではやや思弁的であり，議論はもう少し必要だろうが，結論から言うならば，音節構造の変容を阻止することが，挿入子音 /n/ の主要な機能の 1 つである可能性がある[9]。そして，このことは，〈n 挿入〉が起きる語句よりも，終声の初声化が起きる語句のほうが，相対的に各々の要素間の結びつきが強いことを示唆している。事実，終声の初声化は，単純語の内部，合成語の内部（語幹＋接辞，単純語＋単純語），句の内部など，構造を問わず，様々な環境で起きうるのに対し，〈n 挿入〉は，原則として，「語幹内部」，「語幹＋(接尾辞)＋語尾」といった，文法的な結合が鞏固な構造においては起きない，という形態論的な強い制約がある[10]。ただし，「接頭辞＋語幹」という構造では，〈n 挿入〉が起きることも多く[11]，김유범 외 (2002) など，多くの研究では，〈n 挿入〉の起きる形態論的条件として，「後行要素が自立形態素であること」を挙げている。

しかし，この「後行要素が自立形態素でなければならない」という形態論的条件は議論が必要である。何となれば，この条件に違背する「反例」がいくつか存在するからである。

まず，오미라 (2006) は，밥요 papyo? [pamnjo～pabjo]《ごはんですか？》，그러니깐요 kulenikkanyo [kɯrɔnik'annjo]《だからですよ》，올 걸요 ol kelyo [olk'ɔlljo][12]《来ると思いますよ》のごとく，後行要素が自立形態素ではない（つまり依存形態素の）補助詞요 yo[13] の場合にも〈n 挿入〉が起きうることを指摘している[14]。

また，요 yo のみならず，後行要素が依存形態素でも〈n 挿入〉が起きる例は他にも存在する。例えば，漢字語接尾辞の -용 -yong《用》，-역 -yek《駅》，-염 -yem《炎》，-욕 -yok《欲》などである。학생-용 haksayng-yong《学生用》，서울-역 sewul-yek《ソウル駅》，맹장-염 mayngcang-yem《盲腸炎》，지식-욕 cisik-yok《知識欲》は，それぞれ [haks'ɛŋnjoŋ], [sɔulljɔ^{k}], [mɛŋdʒaŋnjɔm], [tʃiʃiŋnjo^{k}] と発音される。つまり，

「単語＋漢字語接尾辞」という構造においては，このように，〈n 挿入〉が起きる場合もあるのである。さらに，검열 kemyel [kɔmnjɔl]《検閲》などのように，漢字語の「語根＋語根」という構造でも〈n 挿入〉が生じることが，ごく僅かな語例ではあるが，存在する。

形態論的条件「後行要素が自立形態素でなければならない」の「反例」：

①後行要素が補助詞요 yo の場合
②後行要素が漢字語接尾辞の場合
③「語根＋語根」という構造のごく一部の漢字語

こうした一連の言語事実は，「後行要素が自立形態素でなければならない」という〈n 挿入〉の形態論的条件の再考を迫るものである。しかし，筆者の知る限り，後行要素が依存形態素の場合に〈n 挿入〉が起きるのは，補助詞요 yo と，漢字語接尾辞，ごく一部の漢字語の場合のみであり，「後行要素の自立性」という着眼は，概ね正しい方向性だと筆者は考える。このことを立証するために，次章では，「形態素の自立性」という，言語学にとって極めて基本的かつ重要な問題を検討する。

4．形態素の「自立性」とは何か：自立度の階層性

4.1.　自由形式と拘束形式

つとに，Bloomfield が「言語形式（linguistic form）」を「拘束形式（bound form）」と「自由形式（free form）」の 2 種類に分類したことは周知の通りである（Bloomfield 1962; 1993: 207参照）[15]。前者は「決して単独では発せられない言語形式（e.g. 'playing', 'dancing' の '-ing' など）」，後者は「拘束形式以外のすべての言語形式（e.g. 'John', 'run' など）」である。自立性に基づく，言語形式の，こうした二者択一的な分類は，現在の言語研究でもしばしば行なわれる方法であり[16]，また，亀井孝他編著 (1996: 529) も言うように，「自由形式」，「拘束形式」という用語は，簡単明瞭で，言語形式を扱うには便利な術語ではある。マテジウス (1981: 24) の謂う「単語的形態素」，「非単語的形態素」も，「自由形式」，「拘束形式」とい

う区別と軌を一にするものである。しかし，実際に具体的な言語形式をこの2つのカテゴリーに1つ1つ分類しようとすると，いくつかの困難な問題に逢着することになる。

まず，言語形式の自立性が段階的なものであるという点が問題となる。例えば，日本語や朝鮮語において，同じ自由形式であっても，感動詞（感嘆詞）のように，極めて自立性の高いものもあれば，連体詞（冠形詞）のように，修飾する体言と共に用いられる，自立性の低いものもある。(17) 남기심・고영근 (1985; 1993: 65) は，自立語を「自立性の程度」という観点から，감탄사(感嘆詞＝感動詞)＞체언(体言)＞용언(用言)＞부사(副詞)＞관형사(冠形詞＝連体詞) の順に並べており，自立語に階層があることを示している。

また，拘束形式であっても，日本語の一部の助動詞のように，実際の談話では単独でも用いられるものがあり（e.g.「彼，アメリカへ留学するんだって。」「らしい(18)ね。」），一言で「自由形式」「拘束形式」といっても，おのおのの言語形式の自立度は決して均質なものではない。なかんずく，拘束形式の自立度の階層性は顕著である。つまり，言語形式の自立度にはいくつもの段階が存在し，諸形式を「自由形式」と「拘束形式」という2つのカテゴリーに截然と分類するのは，その実，困難なのである。

さらに，「単独で発せられるか否か」という自立性の基準は一見明快に見えるが，その如何の判断が難しい言語形式も少なくない。「単独で発せられるか否か」という点のみを問題とするならば，上の例文の「らしい」は明らかに自由形式に含めるべきであろうし，自立性が極めて低そうな助詞類や語尾類であっても，しかるべき文脈さえ与えれば，単独で現れることもありうる。つまり，言語形式の自立性をより厳密に論ずるためには，「単独で発せられるか否か」に加え，他の客観的な尺度が必要となってくる。

4.2. 附属語と附属形式

言語形式の自立性は，湯川恭敏 (1999: 76) が「独立度の高いもの同士

の結びつきはゆるい」などと断じていることからも分かる通り，畢竟するに，連辞上の問題に帰せられる[19]。すなわち，形態素の自立性の程度は，他の要素との結びつき方（結合の強度）に顕著に現れる。他の要素と「きつく」結びついている形態素はその分自立性が低く，反対に，他の要素と「ゆるく」結びついている形態素はその分自立性が高いと考えられる。では，形態素の，他の要素との結びつきの強弱は，いかにして客観的に測定することができるのだろうか。

つとに服部四郎 (1950/1960) は，種々の言語形式を大きく「附属形式」[20]と「自由形式」に分けた。「附属形式」とは，発話或いは発話段落として現れることがなく，常に他の形式と続けて発話される形式のこと，「自由形式」とは，発話段落として（或ものは発話としても）現れることのある形式である[21]。また，服部四郎 (1950/1960) は，最小の「自由形式」を「単語」と呼び，単語を「附属語」と「自立語」に下位分類している。「附属語」とは，文に該当する発話或いは発話段落（すなわち，その前後に音声のとぎれのある発話断片）として現れることが殆んど或いは全くなく，普通他の単語と続けて発話される単語のこと，「自立語」とは，発話段落として現れることがあり，而も文に該当する発話或いは発話段落として現れることもある単語のことである。さらに，「附属形式」，「附属語」等を合わせて「非自立形式」と呼んでいる。そして，端的に言って，同じ「非自立形式」であっても，「自由形式」に属する「附属語」のほうが「附属形式」よりも相対的に自立性が高く，服部四郎 (1950/1960) は，「附属形式」と「附属語」を見分ける原則として，次の 3 つを立てた：

【原則Ⅰ】職能や語形変化の異なる色々の自立形式につくものは自由形式（すなわち，「附属語」）である：

【例】[22]

子ども の（が），読む の，白い の，静か な の
子ども だけ，読む だけ，白い だけ，静か な だけ
子ども だ けれど，静か だ けれど，読む けれど，白い けれど
子ども だ と（すれば），静か だ と，読む と，白い と

犬の，東京までの，京都からの，少しの，色々の
本を，子どものを，私だけを，あるかないかを
本さえ，東京にさえ，京都からさえ，読んでさえ，静かでさえ
本は，東京には，京都からは，読んでは，静かでは
本も，東京にも，京都からも，読んでも，静かでも
本だぞ，静かだぞ，読むぞ，白いぞ
本だよ，静かだよ，読むよ，白いよ
本だね，本にね，本をね，読むね，白いね
本やノート，子どものや大人の，二枚や三枚，幸福や不幸

以上の「の」，「だけ」，「けれど」，「と」，「の」，「を」，「さえ」，「は」，「も」，「ぞ」，「よ」，「ね」，「や」などは，原則Ⅰによって附属語と認められる。

【原則Ⅱ】二つの形式の間に別の単語が自由に現れる場合には，その各々は自由形式である：

【例】
the man, *the* tall *man*, *the* old *man*
a man, *a* tall *man*, *an* old *man*
of houses, *of* tall *houses*, *of* old *houses*
the apple is, *the apple* on the table *is*
the dog has, *the dog* of this house *has*

【原則Ⅲ】結びついた二つの形式が互に位置を取りかえて現れ得る場合には，両者ともに自由形式である：

【例】
He has..., *Has he...*
It is..., *Is it...*
They are..., *Are they...*

私にだけ，私だけに
人をばかり，人ばかりを

どこへか，どこかへ

このうち，【原則Ⅱ】については，服部四郎 (1960) 自身も指摘しているとおり，やや問題がある。服部四郎 (1960: 490) は，次のように述べている：

「この表現は，厳密に言うと，正しくない。たとえば，*the tall man* はその全体が同一の平面上にあるのではないからである。*the tall man* は，*the man* の *the* と *man* の間に *tall* がはいってできたのではなく，*the man* という構成において *man* の代りに *tall man* がはいってできたのである。原則Ⅱは実用的には便利なものだが，理想を言うと，厳密な（しかし複雑な）表現を用いて書きかえなければならない。」

つまり，the tall man という名詞句は，[the [tall] man] という構造ではなく，[the [tall man]] という構造をしているということである。この指摘は，句の統辞論的構造を動的に見据える上で，重要なものだと思われる。

こうしたことを踏まえて，木村恵介 (2007: 71) は，【原則Ⅱ】を次のように修正することを提案している：

「AB と形式が並んでいる場合，A が AX という形態素連続（X は語）と自由に交換ができるか。あるいは，B が XB という形態素連続と自由に交換ができるか。交換ができれば，A，B は自由形式（語か語連結）である。」

本稿でも，厳密さを重視して，木村恵介 (2007: 71) の修正案（以下これを【原則Ⅱ】とする）を用いることにする。

また，より簡潔な記述のため，以下，上の原則Ⅰ，原則Ⅱ，原則Ⅲのそれぞれの性質を「結合要素の非選択性」，「分離性」，「交換可能性」と称することにしたい：

【原則Ⅰ】：職能や語形変化の異なる色々の自立形式につくものは自由形式である→〈結合要素の非選択性〉

【原則Ⅱ】：ABと形式が並んでいる場合，AがAXという形態素連続と自由に交換ができるか。あるいは，BがXBという形態素連続と自由に交換ができるか。交換ができれば，A，Bは自由形式である→〈分離性〉

【原則Ⅲ】：結びついた二つの形式が互に位置を取り替えて現れ得る場合には，両者ともに自由形式である→〈交換可能性〉

なお，宮岡伯人 (2002) で展開されている「倚辞 (clitic)」と「接辞 (affix)」の峻別も，服部四郎 (1950/1960) の謂う「附属語」と「附属形式」の区別にほぼ対応する。

こうした「附属語」と「附属形式」ないし「倚辞」と「接辞」の違いは，無論，どこまでも段階的なものであって，截然と二分しうる性質のものではない。また，附属形式の中でも，自立性の高低は存在し，服部四郎 (1960: 488–489) が自ら指摘しているように，例えば，「深い」の「い」，「深く」の「く」，「起きる」の「る」，「書けば」の「ば」，「書きたい」の「たい」，「書きます」の「ます」では，この順序で附属性（依存性）が低くなっていく。（つまり，自立性が高くなっていく。）

しかしながら，いわゆる拘束形式に，自立性という点で性質の異なるものがいくつも混在していることを犀利に看破し，諸言語の様々な言語形式を具体的に検討した服部四郎 (1950/1960) の論は卓見であり，その功績は極めて重要である。

5．補助詞ゐ yo の自立性をめぐって

本章では，前章で概観した，形態素の自立性に関する3つの現象形態をメルクマールとし，〈n 挿入〉が起きない主格助詞ゐ i と対比させつつ，補助詞ゐ yo の自立性について検討する。(23)

5.1. 結合要素の非選択性（原則Ⅰ）

まず，「結合要素の非選択性」（原則Ⅰ：職能や語形変化の異なる色々の自立形式につくものは自由形式である）という観点から考えてみる。

主格助詞이 i は，原則的に体言と一部の助詞（만 man《…だけ》など）にしかつかず，しかも，あらゆる体言ではなく，子音語幹の体言に限られるという点で，品詞的制限，音韻論的制限が極めてきつい。また，形態素（morpheme）という抽象的なレベルにおいては，体言は自由形式だと言えるが，形態素の実現態（顕現態）である「形態（morph）」というレベルで見ると，朝鮮語の一部の体言は拘束形式的な様相を呈している。例えば，옷 os《服》や꽃 kkoch《花》のような体言にあっては，主格助詞이 i と結合することで，/d～s/，/d～c/ のごとき，形態音韻論的交替を起こすが，このとき，/os/，/γoc/ という異形態（allomorph）は，単独では現れることのない「拘束語基（bound base）」となって実現している。[24] このような点で，朝鮮語における体言と主格助詞이 i の結合は，純粋な膠着（agglutination）というよりも，Sapir の言う融合（fusion）にも似ており，[25] 日本語における体言と主格助詞｛が｝の結合の仕方とは大きく異なる。｛が｝はあらゆる体言につきうる上，結合する体言が形態音韻論的交替を起こさず，朝鮮語のありかたと対蹠的である。[26]

一方，補助詞요 yo は，主格助詞이 i と異なり，結合する相手の品詞的制限や音韻論的制限がほとんどない。菅野裕臣他 (1988; 1991: 642) は，用言の終止形（해요 hayyo 体）を作る요 yo と，それ以外の要素につく요 yo をそれぞれ別の見出し語として立項し，後者の요 yo については「-의以外の体言語尾，連体形以外の用言の形，副詞等（冠形詞を除く）の末尾に」つく，としている。茲に菅野裕臣他 (1988; 1991: 642) の双方の例文を引いてみよう（傍線は引用者による）：

나는 여기 있어요.《わたしはここにいますよ。》
참 좋군요.《本当に良いですね。》
벌써 비가 왔을걸요.《もう雨が降ったでしょうよ。》

저는요 어저께요 그 분한테서요 소개받은 분을요 만나뵙고요 여러 가지로요 부탁을 드렸어요.《わたくしはですね，きのうですね，あの方からですね，紹介された方にですね，お会いしてですね，色々とですね，お願いしました。》

このように，요 yo は，해 hay 体の用言終止形語尾や，格助詞，とりたて助詞，副詞，接続形語尾など，大半の文節（어절）につきうる要素であり[27]，こうした点において，요 yo は，日本語の｛さ｝，｛ね｝のごとき終助詞と類似している[28]。합니다요 hapnitayo，합시다요 hapsitayo，하겠다요 hakestayo などのように，해 hay 体以外の用言語尾の後にもつきうる点なども考慮すると[29]，요 yo が結合しうる要素の制約は極めて緩いように見える。つまり，요 yo は，職能や語形変化の異なる色々の自立形式につくという，「結合要素の非選択性」を十全に満たしており，その分，自立性が高いと言いうる。

5.2.　分離性（原則Ⅱ）

次に，「分離性」（原則Ⅱ：AB と形式が並んでいる場合，A が AX という形態素連続と自由に交換ができるか。あるいは，B が XB という形態素連続と自由に交換ができるか。交換ができれば，A，B は自由形式である）という観点から，요 yo の自立性を見据える。

まず，눈 nwun《雪》という体言に，主格助詞이 i が結合した눈이 nwuni《雪が》という形を考えてみよう。눈이 nwuni の눈 nwun を눈사람 nwunsalam《雪だるま》，눈만 nwunman《雪だけ》に置き換えて，눈사람이 nwunsalami《雪だるまが》，눈만이 nwunmani《雪だけが》，といった形を作ることは可能である。（A＝눈 nwun，B＝이 i，X＝사람 salam，만 man）

しかし，눈이 nwuni の눈 nwun を눈송이 nwunsongi《雪片》，눈까지 nwunkkaci《雪まで》に置き換えて，*눈송이이 nwunsongii《雪片が》，*눈까지이 nwunkkacii《雪までが》とすることはできない。（A＝눈 nwun，B＝이 i，X＝송이 songi，까지 kkaci）

このことは，主格助詞이 i が子音語幹の要素としか結合しないという，音韻論的な著しい制約に起因するものであり，「結合要素の非選択性」(原則Ⅰ）とも関わるが，いずれにせよ，AとAXを自由に交換できず，主格助詞이 i の自立性は低いと言える。

一方，補助詞요 yo は，눈요 nwunyo の눈 nwun を눈사람 nwunsalam，눈만 nwunman，눈송이 nwunsongi，눈까지 nwunkkaci のいずれで置き換えても，눈사람요 nwunsalamyo，눈만요 nwunmanyo，눈송이요 nwunsongiyo，눈까지요 nwunkkaciyo のように，すべて正しい形となる。（A＝눈 nwun，B＝요 yo，X＝사람 salam，만 man，송이 songi，까지 kkaci）つまり，ABという形態素連続において，AをAXに自由に交換できると言え，分離性という観点でも，요 yo は，自立性が高いことが立証された。

5.3.　交換可能性（原則Ⅲ）

さらに，「交換可能性」（原則Ⅲ：結びついた二つの形式が互に位置を取り替えて現れ得る場合には，両者ともに自由形式である）という観点からも見てみよう。

まず，主格助詞이 i は，常に文節の末尾に置かれ，その直前の要素と位置が入れ替わるようなことはない[30]。ほぼ唯一，補助詞요 yo が이 i の直後につきうるが，その承接の順序は，主格助詞이 i，補助詞요 yo の順と決まっており，両者を入れ替えることはできない。

終助詞的な性質を濃厚に持つ補助詞요 yo も，主格助詞이 i と同様に，ほとんどの場合，文節の末尾に現れる。よって，その直前の要素と位置が入れ替わるようなことは基本的にありえない。ただし，빨리들요 ppallitulyo，빨리요들 ppalliyotul のように，主体あるいは対象の多数性を示す들 tul[31] と補助詞요 yo は，入れ替えが可能な場合がある。これは，話者によって容認度に差があり，「結合要素の非選択性」，「分離性」に比べると，脆弱な証左とはいえ，補助詞요 yo の自立性を支持するものである。

5.4. まとめ：補助詞요 yo の自立性

以上，服部四郎 (1950/1960) の立てた 3 つの原則に基づいて，補助詞요 yo の自立性を，主格助詞이 i と比べながら考えてきたが，これらのことを総括すると，次の通りである：

(イ) 結合要素の非選択性（原則Ⅰ）

主格助詞이 i は品詞的制限，音韻論的制限が極めてきつい上，結合する体言によっては，形態音韻論的交替が起きる。一方で，補助詞요 yo は結合に品詞的制限や音韻論的制限がほとんどなく，多様な要素に自由につきうる。

(ロ) 分離性（原則Ⅱ）

相対的に，主格助詞이 i は分離性が低いが，補助詞요 yo は分離性が高い。

(ハ) 交換可能性（原則Ⅲ）

主格助詞이 i は，基本的に常に文節の末尾に置かれ，その直前の要素と位置が入れ替わることはない。補助詞요 yo も，その位置は文節の末尾であり，直前の要素と位置を入れ替えることは基本的にできないが，主体あるいは対象の多数性を示す들 tul の場合に限り，互いに位置を入れ替えることが可能な場合がある。

そして，(イ)，(ロ)，(ハ) を勘案すると，補助詞요 yo (〈n 挿入〉が起きる) は，主格助詞이 i (〈n 挿入〉が起きない) に比べ，自立性が相対的に高いということが分かる。

5.5. 요 yo の異形態 /요 yo～이요 iyo/ について

ところで，補助詞요 yo は，話者によって，/요 yo/ と /이요 iyo/ という 2 種類の異形態が現れることがある。〈n 挿入〉を論じている諸研究では，/이요 iyo/ については言及せず，例えば，밥요 papyo?，국요

kwukyo?（오미라 2006）のような例のみを扱っていることから，/요 yo/ だけを補助詞요 yo の形態として考えているものと思われる。연세대학교 언어정보개발연구원（1998），국립국어연구원（1999）のような辞書類においても，요 yo のみを立項しており，補助詞요 yo の形態として /요 yo/ のみを認定する見解は，種々の文法書，教材等にも広く見られる。

しかし，母語話者の中には，2つの異形態 /요 yo/ と /이요 iyo/ を持つ人も少なからずおり，野間秀樹（2006）のように，これらを認める論考も存在する。/요 yo/ と /이요 iyo/ の2つの異形態を認める論考と，/요 yo/ のみを認める論考の双方が存在するのはなぜかという点については，猶も攷察の必要があるが，1つの要因としては，話者の世代差や方言差などといった社会言語学的な問題が考えられる(32)。いずれにせよ，前者の場合は，〈n 挿入〉に関して，ここまで述べてきた内容とやや話が異なってくる。野間秀樹（2006: 60）は，요 yo の形態に，/요 yo/ と /이요 iyo/ の2種を認め，その分布を次のように整理している(33)：

/요 yo/ と /이요 iyo/ の分布

母音で終わる要素につくとき	요 yo
저요? 11년 째요. 휴학 중이구요.	
子音で終わる助詞類，語尾類につくとき	요 yo
일을요? 나름대로는요. 시작했으니깐요.	
子音で終わる実詞類につくとき	多くは이요 iyo だが요 yo も
암사동이요? 서른 셋이요? 서울이요. 대부분이요.	

そして，ここで興味深いのは，/이요 iyo/ が実詞類についた場合に，〈n 挿入〉が起きないという点である。〈n 挿入〉に関する先行研究では，そもそも /이요 iyo/ という異形態自体を論及していないために，〈子音語幹＋이요 iyo〉という構造において，なぜ〈n 挿入〉が起きないのかが問題にされていないが，これは正面から論ずべき問題である。

異形態 /이요 iyo/ を持たない話者にとって，補助詞요 yo は，前述の通り，自立性の高い言語形式である。しかし，異形態 /이요 iyo/ を持つ話者にとっては，結合する体言等が母音語幹か子音語幹かという音韻論

的条件によって，요 yo の現れ方（形態）が異なることから，요 yo の自立性は相対的に低いと言わなければならない。それゆえに，〈子音語幹＋이요 iyo〉という構造では，〈n 挿入〉が起きないのである。[34] これは，助詞나 na《…や》の異形態 /이나 ina/ や助詞랑 lang《…と》の異形態 /이랑 iraŋ/（共に子音語幹体言につく）などで〈n 挿入〉が起きないことと軌を一にする。

一方，助詞類，語尾類には，母音で終わっていても子音で終わっていても常に /요 yo/ という形がつき，/요 yo～이요 iyo/ という異形態の交替はない。つまり，助詞類，語尾類につく{요 yo}は自立性が高く，それゆえ〈n 挿入〉が起きる：e.g. -거든요 -ketunyo [kɔdɯnnjo], -군요 -kwunyo [kunnjo].

6．漢字語接尾辞の自立性をめぐって

次に，「後行要素が自立形態素でなければならない」という形態論的条件の反例となる，「後行要素が漢字語接尾辞の場合」について攷察するために，漢字語接尾辞の自立性について論ずる。

それに先立ち，まず，念頭に置いておかねばならないのは，後行要素が接尾辞の場合で〈n 挿入〉が生じるのは漢字語接尾辞の場合に限定され，固有語接尾辞の場合には，決して〈n 挿入〉が起きないという点である（e.g. 쥘름발이 cellumpali《びっこ》，집집이 cipcipi《家ごとに》，먹이 meki《えさ》）。この点を踏まえ，語種の差異による形態論的な振る舞いの違いに注目してみることにしよう。

一般に，漢字語は，固有語と比べたとき，語構造論的に特異な様相を呈している。2 字の漢字語（例えば섬유 semyu《繊維》）は，菅野裕臣 (1988: 8) が「漢字語の場合は漢字 2 字からなるものが多くの場合固有語の語根に相当する」と述べているように，[35] この点で「単純語的」である。[36] しかし，単一の要素からなっているわけではなく，섬 sem《繊》＋유 yu《維》のように，単独では用いられることのない 2 つの要素にさらに分解することができる。[37] つまり，語構造論的には，섬 sem，유 yu はそれぞれ語根（root）と見るべきものであり，[38] 各々形態素ないしそれに準ずる要素

である[39]。そこで，本稿では，섬 sem，유 yu のような，漢字語を成す各要素（文字の平面で言えば漢字 1 字）を，「漢字語形態素[40]」と呼び，一般言語学的な意味での形態素（morpheme）と峻別しておく[41]。

ところで，一般に拘束形態素は，単独で用いられないという点でも拘束的だが，単語内部の現れる位置がきつく決まっているという点でも拘束的だと言える。例えば，日本語の名詞派生接尾辞「−さ」は，「長さ」，「甘酸っぱさ」のように常に語基の後ろにつき，「*さ長」，「*さ甘酸っぱ」といった形はありえない。これが「−さ」が接尾辞と呼ばれる所以であるが，このように，拘束形態素は単語内部においてどこに現れるかがあらかじめ規定されているのが普通である。一方で，自立形態素は，単語の内部で現れる位置が比較的自由である。例えば，「言語」という自立形態素は，「言語政策」のように，複合語の先行要素にもなりうるし，「計画言語」のように，複合語の後行要素にもなりうる。つまり，自立形態素は，単独で用いられうるという点でも自立的だが，現れる位置が概ね自由であるという点においても，自立的だと言える。

このようなことを前提に，漢字語形態素の自立性について考えてみよう。例えば，언 en《言》という漢字語形態素は，언어 ene《言語》，언중 encwung《言衆》，언질 encil《言質》のように，二字漢字語の先行要素としても現れるが，명언 myengen《名言》，실언 silen《失言》，체언 cheyen《体言》のように，二字漢字語の後行要素としても現れる。つまり，漢字語形態素は，単語内部において現れる位置が自由であり[42]，この点において，漢字語形態素は，自立形態素と同じ性質を持っていると言える。そして，その分，自立度が高いと言える[43]。

既に見たように，服部四郎 (1950/1960) は，「附属語」と「附属形式」を峻別するメルクマールのひとつ「原則Ⅲ」において，日本語の「…にだけ」，「…だけに」に見える，助詞「に」と「だけ」の位置の取りかえなどを例に挙げているが，漢字語形態素のありようもこれと類似している。つまり，漢字語形態素はこの点においてまさに「附属語的」である。無論，사회 sahoy《社会》と회사 hoysa《会社》のように，先行要素と後行要素を入れかえてそのまま実在する単語になるという例は少なく，

実際には，귀국 kwikwuk《帰国》，*국귀 kwukkwi《国帰》のように，先行要素と後行要素をそのまま入れかえると，実在しない語になってしまうことも多い。しかし，これは統辞論的あるいは語彙論的な制約によるものであって，結びつく相手は変わっても，同一の言語形式が二字漢字語の先行要素にも後行要素にもなりうるという点は，形態論的に極めて重要な事実である。

そして，接尾辞としても用いられる漢字語形態素[(44)]は，さらに自立性が高いと言える。二字漢字語の前部にも後部にも現れる上に，派生語における接尾辞の位置にも現れうるからである（e.g. 학생용 haksayngyong《学生用》，용도 yongto《用途》，응용 ungyong《応用》）。

また，意味的な観点から見ても，多くの漢字語接尾辞は，接尾辞というよりは語基に近い。野村雅昭 (1978: 122) の「語基は，語の中核となる実質的な意味をあらわすが，接辞は，形式的な意味しかあらわさない」（強調傍点は省略）という，語基と接辞についての意味論的定義に従うならば，漢字語接尾辞の大半は，実質的な意味を担っており，語基に極めて近いと言える[(45)]。例えば，유 yu《油（ゆ）》は，기름 kilum《油（あぶら）》と同じく，「あぶら」という実質的な意味を表す。意味的な実質性という点において，식용유 sikyongyu《食用油》の유 yu と콩기름 khongkilum《大豆油》の기름 kilum の差異を見出すのは困難である。맹장염 mayngcangyem《盲腸炎》の염 yem と급성염증 kupsengyemcung《急性炎症》の염증 yemcung なども同様である。용 yong《用》はやや抽象度が上がり，接辞的な性格が聊か強いが，특별용도 thukpyelyongto《特別用途》の용도 yongto《用途》と학생용 haksayngyong《学生用》の용 yong《用》の意味的な差異はやはりほとんど感じられない。약 yak《薬》，역 yek《駅》，열 yel《熱》などに至っては，単語としてもそのまま用いられうるものであり，いよいよ自立的である。接辞と語基の井然たる線引きは困難だが，先行研究で接尾辞とされているもののうち，意味的実質性が高いものは，むしろ語基と見做すのがより適切ではないかと筆者は考える。

以上のことから，漢字語接尾辞は，形態論的な点でも意味論的な点で

も，完き依存形態素ではなく，一定の自立性が認められると言いうる。

7．結　語

最後に，重複を厭わず，本稿で述べたところを総括し，擱筆することとしよう。

まず，本稿の問いは次のような点に存した：多くの研究では，〈n 挿入〉の形態論的条件を「後行要素が自立形態素であること」としている。しかしながら，一部の先行研究が指摘するように，その「反例」として，①後行要素が補助詞요 yo の場合；②後行要素が漢字語接尾辞の場合；③「語根＋語根」という構造を持つごく一部の漢字語の場合に，〈n 挿入〉が生じる点が挙げられ，これらをどのように説明すべきか。

そこで，本稿では，以下のごとく論を展開した。

まず，言語形式を「自由形式」か「拘束形式」のいずれかに二者択一的にカテゴライズしてきた従前の研究の問題点を剔抉し，言語形式の自立度の階層性，連続性を指摘した。その上で，服部四郎 (1950/1960) などを参看しつつ，形態論的条件の反例となる①と②を検討した結果，①補助詞요 yo，②漢字語接尾辞はともに，拘束形式の中では，相対的に自立性が高いことが明らかになった。このことは，とりもなおさず，〈n 挿入〉の形態論的条件として，後行要素の自立性に対する着目が正しいことを意味している。つまり，この形態論的条件に対して，오미라 (2006) など，一部の先行研究で出された反論は穏当ではなく，〈n 挿入〉が生じるためには，後行要素は，狭義の完き自立形態素ではなくとも，自立的な要素であることが必要だと結論づけうる。(46)

なお，後行要素の自立性が〈n 挿入〉の実現如何を決定するというのは，通時的な視座から見ても，説得力のあるものである。(47) この点に関しては，また稿を改めて，攷察，詳論したい。

【附記】本研究は，平成24年度科学研究費補助金研究活動スタート支援（研究課題番号：24820032）「現代朝鮮語における〈n 挿入〉の総合的研究」の成果の一部である。

註

(1)　本稿のハングルのローマ字翻字（transliteration）は Yale 式（Martin, S.E. 1992参照）に依る。/ / 内は音素表記であり，趙義成・呉文淑 (2004) に依拠する。[ ] は簡略音声表記，《 》は日本語訳である。

(2)　他にも，例えば，「/n/ の流音化および /r/ の鼻音化」をかかる例として挙げうる。一般に /n/ は流音 /r/ の直前あるいは直後には立ちえず，この場合，/n/ は流音 /r/ に交替する（中和する）：e.g. 신랑 sinlang [ʃillaŋ]《新郎》, 설날 selnal [sɔllal]《元日》. しかし，/n/ の直後に /r/ が来る場合，/n/ と /r/ の間に形態素の境界があるときには，/r/ が /n/ に交替する：e.g. 생산량 sayngsanlyang [sɛŋsannjaŋ]《生産量》（趙義成・呉文淑 (2004: 43) 参照）。この交替は，外来語にまで貫徹しており，배스킨라빈스 paysukhinlabinsu《サーティーワン（店名）》, 존레논 conleynon《ジョン・レノン》などもそれぞれ [pɛsɯkʰinnabinsɯ], [tʃonnenon] と発音されうる（ただし，外来語の場合には世代差や個人差もあると思われる）。こうした音韻現象も，後行要素の自立性と関連づけて記述することができよう。また，もう 1 例，言語形式の自立性が音韻現象に関わっている例を挙げるとするならば，音節末子音 /b/ の直後に口音 /k,ɣ/ が来るとき，音節末子音 /b/ が脱落することが話しことばでしばしばあるが（ただし義務的に起きる現象ではない。e.g. 입구 ipkwu [ik'u]《入口》. 趙義成・呉文淑 (2004: 42) 参照），これは，1 単語内で起きる現象であって，句では起きない（집 근처 cip kunche《家の近所》は常に [tʃiᵖk'ɯntʃʰɔ] であって，[tʃik'ɯntʃʰɔ] とは決して発音されない。長渡陽一 (2009: 90) も参照されたい）。これも，言語形式の自立性と関連づけることができそうである。こうした一連の音韻現象は，話者が「境界」を意識しているか否かという問題と密接な関わりがあり，/n/ の挿入もそうしたことと関係があろう。詳細については，また別稿で論じたい。

(3)　〈n 挿入〉がどのような現象であるかを素描した 2 章および 3 章の一部は，辻野裕紀 (2012) の内容と重複する。

(4)　なお，済州道方言では，「同音添加」によって，先行要素の終声と同じ子音が後行要素の初声として添加され，終声の初声化が生じないことがある。例えば가죽옷 kacwukos《革の服》は [kadʒuᵏk'oˡ], 오늘아침 onelachim《今朝》（標準語形：오늘아침 onulachim）は [onɔllatʃʰim] と発音される。배주채 (1996; 2011: 142) 参照。本稿はソウル方言を扱うものだが，終声の初声化が現代朝鮮語において必ずしも普遍的な現象ではないという点をまず押さえておきたい。

(5)　〈終声の初声化〉という用語を用いたのは，野間秀樹 (1988: 22) が嚆矢である。終声の初声化は，「連音（化）」と呼ばれることも多いが，連音（＝音が連なる）という名づけは，音節構造が変容するという，終声の初声化の本質的な点を言い表していないため，本稿では用いない。因みに，韓国の標準発音法では，「뒤 음절 첫소리로 옮겨 발음된다.」（後ろの音節の頭音へ移して発音さ

れる。）という形で説明されているだけで，術語は特に当てられていない。

(6)　〈n 挿入〉は，〈n 添加〉，〈ㄴ덧나기〉（성낙수 1987など），リエゾン（亀井孝他編著1996: 1384）などとも呼ばれ，英語の術語としては 'n-insertion'（Chung, Kook 1980），'n-Epenthesis'（Kim-Renaud, Young-Key 1991），'/n,l/epenthesis'（Sohn, Ho-min 1994）などが用いられている。また，최현배 (1929; 1971: 134) は，挿入される /n/ を '군ㄴ' と称している。菅野裕臣 (1965) では，〈n 挿入〉を「第 2 リエーゾン」，終声の初声化を「第 1 リエーゾン」，菅野裕臣 (2006a, 2007) では，〈n 挿入〉を〈リエーゾン〉，終声の初声化を〈enchaînement〉と呼んでいる。慥かに，終声の初声化は，フランス語のアンシェヌマンと類似した現象であり，〈n 挿入〉も，ある一定の条件のもとで，ある種の音が単語と単語の境界に出現する，という点においては，フランス語のリエゾンと共通している（cf. les [le] + amis [ami] → les amis [lez̲ami]）。なお，1 単語内における終声の初声化では，形態音韻論的交替が起きることがあり，こうした場合にまでアンシェヌマンという術語を用いるのは問題があるかもしれない。フランス語のアンシェヌマンは，どこまでも "il a" や "une école" のような，単語間における連音を言うものである。

(7)　「標準語規定」（1988年 1 月19日大韓民国文教部告示第88–2号）の「第 2 部 標準発音法 第 7 章 音の添加 第29項」にも，次のような記述がある：「합성어 및 파생어에서, 앞 단어나 접두사의 끝이 자음이고 뒤 단어나 접미사의 첫 음절이 '이, 야, 여, 요, 유'인 경우에는, 'ㄴ'소리를 첨가하여 [니, 냐, 녀, 뇨, 뉴]로 발음한다.」（複合語および派生語において，前の単語や接頭辞の最後が子音であり，後ろの単語や接尾辞の最初の音節が '이 [i], 야 [ja], 여 [jɔ], 요 [jo], 유 [ju]' の場合には，'ㄴ [n]' の音を添加し，니 [ni], 냐 [nja], 녀 [njɔ], 뇨 [njo], 뉴 [nju] と発音する。）（日本語訳および便宜上付した発音記号は引用者による）この規定は後行要素が얘 yay や예 yey で始まる場合の言及がないという点で問題がある。また，河野六郎 (1955/1979) が，/n/ が挿入される環境について，「属格関係をなす二語結合で」としているのも注目されるが，봄여름 pomyelum《春夏》，낯익다 nachikta《馴染みのある》などのように，属格関係でなくても〈n 挿入〉は生じうるので，この記述は当たらない。

(8)　橋本萬太郎 (1978: 117–124) は，言語類型地理論の視座から，音節構造について，CVC 構造の性格が濃いビルマ語，クメール語，ベトナム語，タイ語といった南方の諸言語と異なり，日本語や朝鮮語のような北方の言語は CV 構造という性格が濃いと見ている。終声の初声化という現象は，朝鮮語の音節構造における，いわば「CV 構造志向」の現れと言いうる。

(9)　挿入子音 /n/ の機能については，김정우 (1998) なども参看されたい。野間秀樹 (2007: 299) の「/n/ の挿入は，韓国語においてほぼ絶対的に起こる〈終声の初声化〉を拒みうる唯一のデバイス」との言も重要である。

(10)　菅野裕臣 (2007: 191) は，「語幹内部，語幹と（接尾辞と）語尾の間にはリエーゾンは原則として起きない」と述べている。

(11)　신-역장 sin-yekcang《新駅長》，공-염불 kong-yempwul《空念仏》，총-연습 chong-yensup《総練習》，군-일 kwun-il《むだなこと》，첫-여름 ches-yelum《初夏》，첫-이레 ches-iley《赤ちゃんが生まれて7日目になる日＝한이레 haniley》(ただし첫- ches- は接辞ではなく冠形詞（連体詞）に分類する立場もある）など。

(12)　先行要素の末音が /r/ の場合には，流音化（舌側音化）により，挿入子音 /n/ は，/r/[l] で実現する。

(13)　補助詞요 yo は「丁寧化のマーカー」（金珍娥 (2005) を嚆矢とし，金珍娥 (2006), 野間秀樹 (2006) など）と呼ばれることもあるが，丁寧化のマーカーには，所謂해요 hayyo 体を作る요 yo が含まれない。〈n 挿入〉を論じる本稿では，-거든요 ketunyo，-군요 kwunyo などの요 yo も問題となるため，丁寧化のマーカーではなく，伝統的な学校文法の用語である「補助詞」という術語を用いることにする。

(14)　なお，요 yo と結合する先行要素の末音が共鳴音であれば〈n 挿入〉は普遍的（義務的）だが，それ以外の子音（閉鎖音）であれば〈n 挿入〉は随意的であり，終声の初声化が起きることもある。오미라 (2006: 119) 参照。

(15)　原著は，1933年刊行。また，Bloomfield (1962; 1993) では，bound form は「付属形式」と訳されているが，後で触れる服部四郎 (1950/1960) の「附属形式」と紛らわしいので，ここでは「拘束形式」としておく。

(16)　朝鮮語学の論考でもこうした分類はよく目にするところである。例えば，서정수 (1980; 1982: 109–111) は，「自立形態（free form）とは文上に独立的に用いられ得るものである。一般に，1つの単語形式をなす形態素である。」，「拘束形態（bound form）とは独立的に用いられ得ず，常に他の形態素と結合してのみ現れるものである。」と述べている。(原文は朝鮮語。日本語訳は引用者による。)

(17)　例えば，否定の안 an，못 mos は自立語である副詞に分類されるが，その自立性は非常に低い。菅野裕臣 (1988: 9) は「用言の直前にのみ来る否定副詞 'an, mos は接頭辞に極めて近い」と述べている。共和国の正書法では，안 an，못 mos は分かち書きされず，その次に来る用言につけて書かれることも想起されたい。

(18)　例文は，仁田義雄 (1993: 15) による。なお，仁田義雄 (1993) は，「付属辞」（自立することがなく語基に付加されて語を形成するもの）を「助辞 (particle)」，「接辞 (affix)」，「語尾 (ending)」の3種に分け，さらに，形態変化をするか否かという観点から，助辞と接辞をそれぞれ「動助辞」「静助辞」，「動接辞」「静接辞」に下位分類している。そして，「らしい」が属する動助辞が付属辞の中で最も自立性が高いとしている。

(19)　湯川恭敏 (1971: 68–75) も参照のこと。

(20)　既に述べたように，「附属形式」という術語は，しばしば前出の Bloomfield などのアメリカ構造言語学の “bound form” の訳語としても用いられることがあるので，注意が必要である。（なお，服部四郎は，後に「附属形式」を「接合形式」と称するようになる。）また，「附属語」という術語も，橋本文法（学校文法）で謂うところの「付属語」（いわゆる助動詞と助詞の総称で，「自立語」に対する術語）とは異なるという点も留意されたい。

(21)　「発話」，「発話段落」という概念については，服部四郎 (1949/1960) を参看されたい。

(22)　もとの表記はすべてローマ字だが，読みやすさを考えて，漢字仮名交じり表記に変えた。分かち書きはもとのままである。原則Ⅲの日本語の例も同様である。

(23)　요 yo の自立性については，既に深見兼孝・多和田眞一郎 (1993: 161–163) が触れているが，先行形態が何であるかによって，요 yo の「従属度」が変わるとしている。これは，–(으)세요 -(u)seyyo を –(으)세＋요 -(u)sey ＋ yo，–(이)에요 -(i)eyyo を –(이)에＋요 -(i)ey ＋ yo と分解して論じていることなどに起因するが，本稿ではこのような立場はとらない。また，辻野裕紀 (2012: 27) は，요 yo は「いわば「完成した語形」に結合するものである」とし，「語形にとって，요 yo は「足し算的」なものであって，形態論的にはあってもなくてもよいオプショナルな要素である」と述べている。このことは，とりもなおさず，요 yo が自立的な要素であることを示唆している。この点については，河野六郎 (1971/1979: 94)，伊藤英人 (2005: 275) も参照のこと。また，이토 [伊藤英人] (2009: 14) は「‘–요’ は n 挿入が起きうるという点で他の助詞より独立性が強」い（原文は朝鮮語。日本語訳は引用者による）と述べているが，本稿の趣旨からすると，直ちに循環論に陥ってしまうため，茲では別の角度から요 yo の自立性について論ずる。

(24)　菅野裕臣 (1981)，菅野裕臣他 (1988; 1991) など，一部の研究者が朝鮮語のいわゆる助詞を「語尾」と呼んでいるのは，こうした点を重視してのことと思われる。ただ，朝鮮語の格助詞は，体言の一部ではなく，体言との境界が明瞭な上，どこまでも格のマーカーとしての機能しかない（つまり，性，数などといった他の文法範疇を同時に示しているわけではない）という点において，ラテン語などの格語尾とは明らかに性格が異なる。（一形態素一義という点が極めて膠着語的である。膠着語の「形態素対機能の 1 対 1 対応」については，品川大輔 (2012) などを参照）また，複数の格助詞が共起しうる点も，屈折辞としての性質が濃厚なヨーロッパ語の格語尾とはいかにも異なると言わなければならない。菅野裕臣他 (1988; 1991: 1020) は「向格・与格・処格・奪格・具格・共格・起点格・到達格＋–의，–처럼，–보다，–가/–이（＋아니다）；–에로，–에로의，

-에를, -엘, -부터가」といった「格語尾同士の結合があり得る」としている。남윤진 (2000) が，朝鮮語の助詞類の多くを접어（接語 clitic）とする提案をしているのも注目される。角田太作 (1991) は，日本語の助詞を「側置詞 (adposition)」の1つである「後置詞 (postposition)」としているが，朝鮮語の助詞についても，Lee, Keedong (1993) のように，에 ey，에게 eykey，에서 eyse などといった格助詞類を 'postposition' と呼ぶ論者がある。野間秀樹 (2012: 74–75) は「韓国語や日本語のいわゆる助詞は，膠着語的な性格を発揮し，〈切り離しが可能な接辞〉，つまり〈分離接辞〉(disjunctive affix) とでも言うべき様相を呈している」と述べている。

(25)　サピア (1998)【原著は1921年刊行】，山中桂一 (1998) などを参照のこと。

(26)　日本語の格助詞については，奥田靖雄 (1985: 145–157) も参考になる。鈴木重幸 (1972: 147–149) は「文法的な形のなかにあって，文法的な意味に応じて変化する部分」を「語尾」と「くっつき」とに分けており，日本語の学校文法の助詞の大部分を「くっつき」に分類している。語尾とくっつきのちがいは，語幹に対する「相対的な統一性あるいは分離性，すなわち，むすびつきのかたさ＝ゆるさという程度のちがい」と述べている。鈴木重幸 (1972) の基準に従えば，朝鮮語の格助詞は，日本語のそれと異なり，語尾とくっつきの中間的な存在だと言えるかもしれない。菅野裕臣 (2006b: 162–164) も参照のこと。

(27)　연세대학교 언어정보개발연구원 (1998: 1363) では，「'-어', '-지', '-을래' 등 해체의 일부 용언의 종결 어미」('-어', '-지', '-을래' など，해 hay 体の一部の用言の終結語尾）や「독립적인 구 성분 뒤」(独立的な句成分の後ろ）につくとしている。また，국립국어연구원 (1999) では，「주로 해할 자리에 쓰이는 종결 어미나 일부 하게할 자리에 쓰이는 종결 어미 뒤」(主に해 hay 体に用いられる終結語尾や一部하게 hakey 体に用いられる終結語尾の後ろ）や「체언이나 부사어, 연결 어미 따위의 뒤」(体言や副詞語，終結語尾の類の後ろ）につくとしている。(日本語訳は引用者による。)

(28)　金珍娥 (2006: 97) も「日本語の終助詞の性格と非常に似ている」とし，談話の分析にあたって，요 yo を「終助詞」として処理している。

(29)　고영근 (1989: 296–297, 383–389) 参照。ただし，これらの形は現代のソウル方言以外の形，あるいは，社会方言的な形であると思われ，母語話者によって容認度が異なる可能性がある。

(30)　日本語の助詞は，「私にだけ」「私だけに」，「ひとりをばかり」「ひとりばかりを」,「どこへか」「どこかへ」(服部四郎1960: 478),「バスのみで行ける」「バスでのみ行ける」(風間伸次郎2003: 263) のように，入れ替えが互いに可能な場合があるが，朝鮮語の助詞は，日本語のそれと比べると，相対的に入れ替えがしにくいようである。例えば，나한테만 nahantheyman《私にだけ》は可能だが，*나만한테 namanhanthey《lit. 私だけに》は不可能である。

(31)　菅野裕臣他 (1988; 1991: 262) は，「主体あるいは対象の多数性を示す」들 tul（語尾）と，「多数」の들 tul（接尾辞）を各々別に立項し，前者の들 tul は，-가/-이，-를/-을，-의，-아/-야，-여/-이여以外の格語尾，とりたて語尾，連体形と終止形以外のすべての用言語尾，副詞，後置詞（連体形を除く）につく，としている。このように前者の들tul は様々な要素に自由につくことができ，単独で用いられることはないものの，요 yo と同じく，自立性の高い形態素だと言える。風間伸次郎 (2003: 255) は，「-deur は文中のさまざまな要素に自由につくことができ」る，とし，こうした様相を 'floating' と称している。

(32)　〈n 挿入〉と補助詞요 yo の方言差という問題は，未だほぼ未開拓であるが，後藤祐司 (2013) にかかる研究の萌芽が見える。また，요 yo の世代差の問題については，梅田博之 (2012) が参考になる。なお，後藤祐司 (2013)，梅田博之 (2012) といった論考の存在は各々，東京大学の福井玲先生，生越直樹先生のご教示によって知った。この場を借りて，感謝申し上げる。

(33)　野間秀樹 (2006) では，요 yo，이요 iyo にそれぞれハイフンをつけているが，本稿では，表記を統一するためにつけないでおく。

(34)　〈母音語幹＋요 yo〉という構造では，そもそも先行要素が子音で終わっていないので，〈n 挿入〉は起きえない。なお，野間秀樹 (2006) は，文末に現れる요 yo と文中の文節末に現れる요 yo を区別していないが，許秀美 (2007: 73) は両者を峻別し，/이요 iyo/ という異形態は，文中の文節末には現れないとしている。つまり，요 yo の異形態として /이요 iyo/ を持つ話者であっても，/이요 iyo/ が現れるのは文末に限られ，文中の文節末では音韻論的環境を問わず常に /요 yo/ のみが現れるというわけである。許秀美 (2007: 75–76) によれば，文末の요 yo と文中の文節末の요 yo は各々ムード的意味も異なり（前者は「丁寧さ」，後者は「やわらかさ」を表すという），両者は区別されるべきものだと主張しているが，いずれにせよ，〈子音語幹＋이요 iyo〉では〈n 挿入〉は起きず，〈子音語幹＋요 yo〉でのみ〈n 挿入〉が起きる。

(35)　日本語形態論の論考である森岡健二 (1997: 79–81) も，「日本語における漢語」について，「漢字は一字一字が有意味であるところから，一字一字の漢字は日本語の形態素として資格をもつものが多い」としつつも，「日本語形態素として安定しているものから不安定なものに至るまで，種々の層が認められる」とした上で，「漢字形態素は一字で自立するものがあるにせよ，全体としては結合形式と考えてよく，二字漢語になって初めて和語系の一語基に対応すると見られる」と述べている。

(36)　この点を重視し，筆者は，辻野裕紀 (2010) では，２字からなる漢字語をすべて単純語と見做した。

(37)　これは，바 pa ＋다 ta《海》，하 ha ＋늘 nul《空》のように分解しえない，固有語単純語のありようと対蹠的である。影山太郎 (1989, 1993) が「帰国」の

「帰」,「国」,「建築」の「建」,「築」などといった一字漢語も「基体（base）」（＝語基）とし，全体を複合語と見做していることも想起されたい。

(38)　ここでの「語根」という概念は이익섭 (1968, 2005) に依る。2字の漢字語は，語根同士が結合したもの以外に，語幹同士が結合したもの（e.g. 정열 cengyel《情熱》），語幹と語根が結合したもの（e.g. 등유 tungyu《灯油》）もある。

(39)　このような構造は，例えば，英語の philo-sophy《哲学》のような語構造のありようと似ている。

(40)　日本語学では，野村雅昭 (1978) などのように「字音形態素」と呼ぶことが多い。松下大三郎 (1930; 1974: 50–51) は，「不熟辞」というカテゴリーの中に漢字語形態素を含めている。辞書類などでは，「造語成分」とされることもある。

(41)　野間秀樹 (2012: 59–60) は，漢字語形態素について，「十全たる形態素というより，形態素とは異なった平面で動く，形態素に準じる単位と言うべきもので，いわば〈亜形態素/아형태소〉"quasi-morpheme" といったところである」と述べている。また，小川晋史 (2010: 78) は，日本語の二字漢語について，単純語において典型的に見られるような形態的特徴である「語の長さが3～4モーラ（4モーラ以下）と短い」という点と，複合語において典型的に見られるような形態的特徴である「複数の形態素から構成される」という点を兼ね備えているとし，「二字漢語は形態的に単純語と複合語のハーフと呼べる存在」と述べているが，これは朝鮮語の二字漢字語についても概ね当てはまる特徴である。朝鮮語の二字漢字語も，日本語とは長さが異なるが，「語の長さが2音節と短い」という単純語の特徴と，「複数の（漢字語）形態素から構成される」という複合語の特徴を合わせ持っている。

(42)　固有語接尾辞の場合は，このようにはいかない。例えば，-질 -cil は가위질 kawicil《はさみを使うこと》，다리미질 talimicil《アイロンがけ》のように，常に単語の最後につき，*질가위 cilkawi，*질다리미 ciltalimi のように，他の位置に現れることはありえない。

(43)　これは，川口裕司 (1992) が連辞の構成要素の結合の度合いの統辞論的規準として論じている3つの点，すなわち，「並び替え（仏：permutation）」，「置き換え（仏：commutation）」，「両立可能性（仏：compatibilité）」のうち，「並び替え」に相当するものである。

(44)　野村雅昭 (1978) は，日本語の，接辞として用いられる字音形態素を「接辞性字音語基」と呼んでいる。

(45)　つとに，時枝誠記 (2007: 278) は，「「山」「川」の如きは明かに独立した体言と考えられているが，「旅館」「写真館」の館，「富士山」「深山」の山，「薬舗」「店舗」の舗の如きは，独立しては用いられないが，猶体言以外のものと考えることは出来ない。」（原文の傍点は省略）と述べている。また，野村雅昭 (1977:

252–253) の次の言も重要である：「「アメリカ–的」・「イギリス–式」・「フランス–風」の「的」・「式」・「風」など，漢語系の一字からなる単位は，種々の語基との結合が可能であり，意味も形式的で，接辞とよんでさしつかえない。これからすれば，「アメリカ–人」・「外国–人」なども，かたちのうえからは，接辞とみてよさそうである。しかし，「人（ジン）」は，「米人」・「外人」など二字漢語の要素としてもつかわれ，このばあいを語基とし，「アメリカ人」のばあいは接辞とするのは，不自然な感じがする。このような対立は，「汽車—乗用車」・「鉄橋—歩道橋」・「海水—地下水」など，おおくの漢語語基にみられる現象であり，一律に，これらを語基か接辞かに分類することは，不適当である。これらのうち，意味が実質的で明確なものは，語基とみなし，意味が形式化したものは，接辞としてあつかうのが穏当な措置とかんがえられる。そのあいだは連続的とみるべきである。」（原文の傍点は省略）さらに，斎賀秀夫 (1997: 26) は，「学生帽」と「学生服」，「教育者」と「教育長」，「外国人」と「外国語」などといった例を挙げ，「前者は単独に用いられることのない故をもって「接尾語」とされ，後者は他に単独の用法をもつがために「語」とされるとしても，この両者の上の語への結合のしかたそのものには，本質的に異なるものは何もない」と喝破しているが，こうした事情は朝鮮語も似たところがある（例えば위장염 wicangyem《胃腸炎》と위장병 wicangpyeng《胃腸病》）。

(46)　なお，③についても，漢字語形態素の自立度の相対的な強さ，という点からある程度説明しうるが，さらなる議論が必要であろう。今後の課題としたい。現段階で明らかなのは，漢字語の「語根＋語根」という構造で〈n 挿入〉が起きる例はごくわずかであり，起きないもののほうが圧倒的に多いということ，そして，오미라 (2006) や辻野裕紀 (2012) が論じているように，この構造で〈n 挿入〉が起きるのは，基本的に先行要素の末音が共鳴音でかつ後行要素の頭音が /y/ の場合に限られるということである。

(47)　〈n 挿入〉の通時的な発生論については，고광모 (1991, 1992) を参看されたい。

参　考　文　献

(1) 日本語文献

伊藤英人 (2005)「韓国語とその周辺の言語 —何が似ていて，何が違うか—」，『2005 年度 韓国語教師研修会講義要旨』，東京：国際文化フォーラム.

梅田博之 (2012)「韓国語の丁寧さを表わす終助詞요についての覚え書」，『言語と文明』10，千葉：麗澤大学大学院言語教育研究科.

小川晋史 (2010)「日本語の諸方言における二字漢語のアクセント —単純語と複合語の狭間で—」，大島弘子・中島晶子・ブラン，ラウル編 (2010)『漢語の言語学』，東京：くろしお出版.

奥田靖雄 (1985)『ことばの研究・序説』，東京：むぎ書房.
影山太郎 (1989)「形態論・語形成論」，崎山理編『講座日本語と日本語教育 第11巻 言語学要説（上)』，東京：明治書院.
影山太郎 (1993)『文法と語形成』，東京：ひつじ書房.
風間伸次郎 (2003)「アルタイ諸言語の3グループ（チュルク，モンゴル，ツングース)，及び朝鮮語，日本語の文法は本当に似ているのか —対照文法の試み—」，アレキサンダー，ボビン・長田俊樹共編『日本語系統論の現在』，京都：国際日本文化研究センター.
亀井孝・河野六郎・千野栄一編著 (1996)『言語学大辞典 第6巻 術語編』，東京：三省堂.
川口裕司 (1992)「言語記号としての複合名詞」，『人文論集』43-2，静岡：静岡大学人文学部.
菅野裕臣 (1965)「現代朝鮮語のリエーゾンについて」，『朝鮮学報』36，天理：朝鮮学会.
菅野裕臣 (1981)『朝鮮語の入門』，東京：白水社.
菅野裕臣 (1988)「朝鮮語の構造について —その膠着的特徴と関連して—」，『学習院大学言語共同研究所紀要』11，東京：学習院大学言語共同研究所.
菅野裕臣 (2006a)「朝鮮語の音と文字」，『韓国語学年報』 2，千葉：神田外語大学 韓国語学会.
菅野裕臣 (2006b)「朝鮮語の形態論的単位について」，『韓国語学年報』 2，千葉：神田外語大学 韓国語学会.
菅野裕臣 (2007)「文字，音，正書法」，『韓国語学年報』 3，千葉：神田外語大学 韓国語学会.
菅野裕臣・早川嘉春・志部昭平・浜田耕策・松原孝俊・野間秀樹・塩田今日子・伊藤英人共編 (1988; 1991)『コスモス朝和辞典 第2版』，金周源・徐尚揆・浜之上幸協力，東京：白水社.
金珍娥 (2005)『NHK テレビ 안녕하십니까? ハングル講座』6月号，野間秀樹監修，東京：日本放送出版協会.
金珍娥 (2006)『日本語と韓国語の談話における文末の構造』，東京外国語大学大学院博士学位論文.
木村恵介 (2007)『中国語における動補型複合動詞』，千葉大学大学院博士学位論文.
河野六郎 (1955)「朝鮮語」，服部四郎・市河三喜編『世界言語概説 下巻』，東京：研究社.【河野六郎 (1979) に再録されている】
河野六郎 (1971)「朝鮮語の膠着性に就いて」，東京教育大学言語学研究会編『言語学論叢』11，東京：東京教育大学言語学研究会.【河野六郎 (1979) に再録されている】
河野六郎 (1979)『河野六郎著作集 1』，東京：平凡社.

後藤祐司 (2013)「丁寧化マーカー'–yo' と n 挿入現象に見られる方言差」,『ありあけ 熊本大学言語学論集』12, 熊本：熊本大学文学部言語学研究室.
斎賀秀夫 (1997)「語構成の特質」, 斎藤倫明・石井正彦編 (1997) 所収.
斎藤倫明・石井正彦編 (1997)『語構成』, 東京：ひつじ書房.
サピア, エドワード (1998)『言語 ことばの研究序説』, 安藤貞雄訳, 東京：岩波書店.【原著は1921年刊行】
品川大輔 (2012)「日本語動詞構造の形態類型論的位置づけ」, 丹羽一彌編著『日本語はどのような膠着語か 用言複合体の研究』, 東京：笠間書院.
鈴木重幸 (1972)『日本語文法・形態論』, 東京：むぎ書房.
趙義成・呉文淑 (2004)「朝鮮語」,『言語情報学研究報告 4　通言語音声研究 音声概説・韻律分析』, 東京：東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」.
辻野裕紀 (2010)「韓国語大邱方言における名詞のアクセントと分節音の関係」,『朝鮮語研究』 4, 大阪：朝鮮語研究会.
辻野裕紀 (2012)「現代朝鮮語の〈n 挿入〉をめぐって ―形態論的条件と語種論的条件を中心に―」,『外国語教育研究』15, 東京：外国語教育学会.
角田太作 (1991)『世界の言語と日本語』, 東京：くろしお出版.
時枝誠記 (2007)『国語学原論（上）』, 東京：岩波書店.【底本は, 時枝誠記 (1941)『国語学原論』, 東京：岩波書店.】
長渡陽一 (2009)『韓国語の発音と抑揚トレーニング』, 東京：アルク.
仁田義雄 (1993)「現代語の文法・文法論」, 工藤浩他著『日本語要説』, 東京：ひつじ書房.
野間秀樹 (1988)『ᄀᆞᆯ 朝鮮語への道』, 東京：有明学術出版社.
野間秀樹 (2006)「現代朝鮮語の丁寧化のマーカー"–yo/–iyo" について」,『朝鮮学報』199・200, 天理：朝鮮学会.
野間秀樹 (2007)「形態音韻論からの接近」, 野間秀樹編著『韓国語教育論講座 第1巻』, 東京：くろしお出版.
野間秀樹 (2012)「文法の基礎概念」, 野間秀樹編著『韓国語教育論講座 第2巻』, 東京：くろしお出版.
野村雅昭 (1977)「造語法」,『岩波講座 日本語9 語彙と意味』, 東京：岩波書店.
野村雅昭 (1978)「接辞性字音語基の性格」,『電子計算機による国語研究IX』, 東京：国立国語研究所.
橋本萬太郎 (1978)『言語類型地理論』, 東京：弘文堂.
服部四郎 (1949)「具体的言語単位と抽象的言語単位」,『コトバ』2–12, 東京：国語文化学会.【服部四郎 (1960) に再録されている】
服部四郎 (1950)「附属語と附属形式」,『言語研究』15, 東京：日本言語学会.【服部四郎 (1960) に再録されている】

服部四郎 (1960)『言語学の方法』，東京：岩波書店.
深見兼孝・多和田眞一郎 (1993)「朝鮮語の文末部 —{요}を中心として—」，藤原与一編『言語類型論と文末詞』，東京：三弥井書店.
Bloomfield, Leonard (1962; 1993)『言語』，三宅鴻・日野資純訳，東京：大修館書店.【原著は1933年刊行】
許秀美 (2007)「現代韓国語の指定詞の해요体における２つの形式について」，『朝鮮語教育 —理論と実践—』２，新潟：朝鮮語教育研究会.
松下大三郎 (1930; 1974)『改撰標準日本文法』，徳田政信編，東京：勉誠社.
マテジウス，ヴィレーム (1981)『機能言語学〈一般言語学に基づく現代英語の機能的分析〉』，ヴァレク，ヨゼフ編，飯島周訳，東京：桐原書店.【原著は1961年刊行】
宮岡伯人 (2002)『「語」とはなにか —エスキモー語から日本語をみる』，東京：三省堂.
森岡健二 (1997)「形態素論」，斎藤倫明・石井正彦編 (1997) 所収.
山中桂一 (1998)『日本語のかたち —対照言語学からのアプローチ』，東京：東京大学出版会.
湯川恭敏 (1971)『言語学の基本問題』，東京：大修館書店.
湯川恭敏 (1999)『言語学』，東京：ひつじ書房.

(2) 朝鮮語文献

고광모 (1991)「ㄴ첨가와 사이시옷에 관하여」,『언어연구』3, 서울: 서울대학교 언어학과.
고광모 (1992)「ㄴ첨가와 사이시옷에 대한 연구」,『언어학』14, 서울: 한국언어학회.
고영근 (1989)『국어형태론연구』, 서울: 서울대학교출판부.
국경아・김주원・이호영 (2005)「선호도 조사를 통한 ㄴ첨가 현상의 실현 양상 연구」,『말소리』53, 서울: 대한음성학회.
국립국어연구원 (1999)『표준국어대사전』, 서울: 두산동아.
기세관 (1990)『국어 단어형성에서의 /ㄹ/ 탈락과 /ㄴ/ 첨가에 대한 음운론적 연구』, 원광대학교 대학원 박사박위논문.
기세관 (1991)「첨가음 /ㄴ/의 기능」,『어문논총』12・13, 광주: 전남대학교.
기세관 (1999)「첨가음 'ㄴ'의 성격」,『선청어문』27, 서울: 서울대학교 국어교육과.
김선철 (2003)『표준 발음 실태 조사Ⅱ』, 서울: 국립국어연구원.
김선철 (2006)『중앙어의 음운론적 변이양상』, 서울: 경진문화사.
김승호 (1992)「콧소리 덧나기」,『국어국문학』11, 부산: 동아대학교.
김유범・박선우・안병섭・이봉원 (2002)「'ㄴ'삽입 현상의 연구사적 검토」,『어문논집』46, 서울: 민족어문학회.

김정우 (1998)「/ㄴ/ 삽입 현상의 형태론과 음운론」,『방언학과 국어학　청암 김영태 박사 회갑기념논문집』, 서울: 태학사.
남기심・고영근 (1985; 1993)『표준국어문법론』, 서울: 탑출판사.
남윤진 (2000)『현대국어의 조사에 대한 계량언어학적 연구』, 서울: 태학사.
배주채 (1996; 2011)『국어음운론 개설』, 성남: 신구문화사.
서정수 (1980; 1982)「문장의 구조」, 전재호・박병채 외『신국어학개론』, 서울: 형설출판사.
성낙수 (1987)「이른바 'ㄴ덧나기'에 대하여」,『한국어학과 알타이어학』, 대구: 효성여대출판부.
엄태수 (1995)「복합어의 음운현상과 최적이론」,『어문연구』88, 서울: 한국어문교육연구회.
엄태수 (2010)「ㄴ첨가에 대한 표준어 규정의 연구」,『국제어문』50, 서울: 국제어문학회.
연세대학교 언어정보개발연구원 (1998)『연세 한국어사전』, 서울: 두산동아.
오미라 (2006)「ㄴ-삽입 환경의 재검토」,『언어학』14-3, 논산: 대한언어학회.
이익섭 (1968)「한자어 조어법의 유형」,『이숭녕박사 송수기념논총』, 서울: 을유문화사.
이의섭 (2005)『한국어 문법』, 서울: 서울대학교출판문화원.
이토 히데토 [伊藤英人] (2009)「유형론 및 언어접촉의 관점에서 본 한국어와 일본어 —일본어 화자 대상 한국어교육의 입장에서—」, 伊藤智ゆき編『朝鮮語史研究』, 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
최정순 (1986)『국어 음운규칙의 단계적 적용에 대하여 —탈락과 삽입을 중심으로—』, 서강대학교 대학원 석사학위논문.
최정순 (1995)『국어 통사음운론 연구』, 서강대학교 대학원 박사학위논문.
최현배 (1929; 1971)『우리말본』, 서울: 정음사.

(3) 英語文献

Chung, Kook [정국] (1980) *Neutralization in Korean: A Functional View*, Ph.D. dissertation, University of Texas at Austin.
Kim-Renaud, Young-Key [김영기] (1991) *Korean Consonantal Phonology*, 서울: 한신문화사.
Lee, Keedong [이기동] (1993) *A Korean Grammar: on Semantic-Pragmatic Principles*, 서울: 한국문화사.
Martin, Samuel. E. (1992) *A Reference Grammar of Korean*, Tokyo: Charles E. Tuttle.
Sohn, Ho-min [손호민] (1994) *Korean*, London & New York: Routledge.

（九州大学大学院専任講師）